

# 紆余曲折、韓国滞在 10 年記

## 第 1 回 留学編 -激動の時代-

皆様、こんにちは。このエッセーを通じ、自分の経験、特に当時は決して多くなかった韓国への留学、現地での体験、留学の経験がその後の大使館などでの勤務に繋がったことなどをお伝えできればと思います。

### 1980 年代の韓国

1986 年から 87 年に美術史研究のため、韓国に留学しました。当時の韓国は、政治の民主化を求める運動のただなかにありました。1979 年 10 月の朴正熙大統領暗殺事件、その後の軍クーデター、2 期続いた軍出身大統領、大統領直接選挙をうたった民主化宣言と 80 年代は韓国社会が大きく変化した時代でした。86 年にソウルでアジア大会、88 年にオリンピックの開催も決まり、韓国経済も新興国の一員として右肩上がりの成長を始める時期でもありました。この激しく社会が動く時代に、私はソウルに留学することになりました。

### 日本とアジアの古代美術への想い

大学院では、日本の古代美術、特に 7、8 世紀の仏像を研究していました。当時は年間 3 カ月ほど奈良の東大寺近くにあった「日吉館」という旅館に居候しながら、寺院を回って勉強をしていました。

奈良や京都の寺院を回り、7 世紀の飛鳥、白鳳時代の仏像、8 世紀の天平時代の仏像に接する度に、日本の古代美術への理解をさらに深めるには、中国や朝鮮半島の美術も学んでおかねばならないとの思いが強くなりました。

当時は 1980 年に NHK で「シルクロード」が放送され、敦煌の仏教美術をはじめとする中国の歴史や美術への関心が高まっていました。そのような機運の中、学生訪中団を作り、石窟寺院を回る旅を企画しました。

山西省太原の雲崗石窟、河南省の龍門石窟を初めて目にし、中国古代文化のスケールの大きさと悠久の歴史に感嘆しました。そして、実際に現地に赴き、自分の目で観て五感で感ずることの重要性も認識しました。



日吉館に居候中の筆者

大学 4 年の時には 1 人で韓国を旅しました。バスを乗り継ぎ、百済の都であった公州や扶余、新羅の都であった慶州を訪ねました。韓国の文化財を観るたびに、ギリシャからシルクロードを経て、東南アジア、中国、朝鮮半島、日本へと東遷する美術、特に仏像様式の伝播と地域毎に異なる造形の謎を解きたい気持ちが強くなりました。

当時は韓国の地方を 1 人で旅する日本人は少なく、珍しがられたり、また怖い目にも合いました。日本海側の山寺を訪ねた時は、警備兵にライフルを向けられたこともありました。また、地方の旅館に泊まると、しばしば警察官が訪ねてきて職務質問を受けました。日本にはない緊張感を肌で感じながら、韓国の置かれた厳しい現実を知ることになりました。

当時はまったく韓国語がわからず、ノートに「地名」と「食べ物」を漢字とハングルで書き、ハングルを読み解きながら、バスや電車を乗り継いで、地方を回りました。

韓国の論文を読むのはもちろん、言葉が少しでも出来れば、コミュニケーションがとれ、調査の旅も円滑に出来るのではと思うようになりました。

現在は韓国語を始めとする様々な語学講座があり、教材も簡単に手に入ります。しかし、当時は韓国語講座が少なく、学習用のテキストや辞典も種類の少ない時代でした。

そんな折、1984年にNHKで「アンニョンハシムニカ、ハングル講座」が開始され、ラジオを通じて韓国語を学ぶようになりました。またYMCAの語学講座に通い、それに加え、個人レッスンも受けるようになりました。

### 韓国留学を決意

86年3月に大学院修士課程を修了しましたが、なかなか職は見つかりませんでした。そんな折、韓国の研究者からの誘いもあり、思い切って韓国への留学を決意しました。

当時は、古代美術を学ぶのなら、中国留学が主流でした。「何で韓国へ留学？行って何を学ぶの？帰って来てからどうするの？」と多くの人から厳しい御意見をいただきました。論文が書けるのか？、帰国後の生活は？、資金は？と現実的な問題が解決できるのかとの問いを突き付けられました。

そんな折、指導教授から「せっかくの機会だから、留学して、言葉や韓国の美術を学んで来なさい。そしてその文化を包む朝鮮半島の気候風土や四季を感じて来なさい」、さらに「古代には日本から百済や隋、唐に渡り、高官になった日本人も数多い、海外で活躍することも視野にいれてみなさい」と励ましの言葉をいただきました。

迷う心と背中を押してくれる言葉でした。

当時、留学支援の制度は少なく、当然、自費留学でした。貯金を叩き、韓国ソウルの延世大学語学堂に入ることになりました。

学校に紹介してもらった下宿屋で留学生活がスタートしました。

下宿には、交換留学で来た日本人学生が1人、後は韓国人学生が7、8名ほどいました。韓国語の授業ですが、一日に4時間、授業は午前中のみで午後は特別授業でした。全ての授業は韓国語で行われ、自然と会話能力が身についてきました。午後は講義を聴講し、研究者を訪ねたりして過ごしました。また日本語学科の学生に会って日本語と韓国語の会話を教え合っていました。

当時、日本語能力は就職の重要な条件で、喫茶店には会話練習をするグループが必ずいました。語学の習得に対し、韓国の若者は大変に積極的で、その意欲の高さに驚く毎日でした。

### 留学の思い出

韓国での学生生活で、困ったことは催涙ガスとデモです。催涙ガスは単に煙たいというのではなく、体の湿った個所がひりひりと痛くなるような感じです。教室に催涙ガスが漂ってくることもあり、デモが激しく休講となることも多々ありました。

日本人なら必ず直面する対日感情ですが、人や世代により様々で、画一的なものではありませんでした。

ある女子大生からは「なぜ、日本は韓国を併合したのか」と厳しく問われたこともありました。私がどんなに説明をしても彼女は頑として受け付けませんでした。自分の主張がすべて正しい、日本をすべて否定するというものでした。

当時は、インターネットもなく、海外に出ることも難しい時代でした。日本や世界に対する情報も乏しく、教育もあり、日本のことを知る材料や体験が得難い時代でした。

一方「国民学校の先生は分け隔てなく接してくれた」、「日本人は正直な商売をしていた」など、観念的な対日感情ではなく、自らの体験を通して日本時代を語る中・老年の人々は数多くおりました。

彼らは、自分の幼少期や青春時代をとおして戦前の状況や戦後の社会変化、日本と日本人のことを体験的に知っている世代でした。

日本と韓国の良い面も悪い面も知り、そして、過去の歴史を教訓にしたいという世代とも言えましょう。

それに対し、戦後生まれの世代からは「自由主義陣営の一員として苦勞している韓国への関心が日本にはない」ということもよく聞きました。一方で日本の製品や経済成長など見習うべき点もあると言う「嫌悪と尊敬が共存する」世代という印象を受けました。

当時は日本の教育を受け日本語を話す世代、朝鮮戦争後に教育を受けたハングル世代と呼ばれる世代、またそれ以降の若い世代と様々な世代が混在していました。多様な日本への感情があり、その混とんとした時代に、思い切って留学したからこそ、様々な世代の考えと対日観を知ることができました。この経験は後の仕事に大いに資することになりました。

#### **留学後の意外な展開**

87年の春になると政情は不安定となり、デモも一段と激しくなってきました。語学の勉強もだいぶ進み、一応、短い論文も仕上げましたので、帰国することにしました。

運よく、指導教授の著作を手伝ってほしいとの話をいただきました。朝鮮半島の古代美術に関する本を作る仕事でしたので、編集者やカメラマンと共に、自分が尋ね歩いた韓国内の寺院や山寺を回り、翌年には本が完成しました。留学の成果ともいえる本を出版することができました。

二冊目の執筆で旅館に籠っていたそんな折、突然、ソウルから電話がかかって来ました。これが人生の大きな転換点になるとは、当時は知る由もありませんでした。

つづく